株式会社ラナエクストラクティブ（仙台市）
エンジニア
三浦 綾華 さん（26歳）
Ayaka Miura

学生時代にプログラミングを猛勉強
広告業界をITで支える エンジニア界の若手有望株

それぞれの専門知識を生かし クリエイティブ分野から 世の中の課題を解決

2007年に設立された株式会社ラナエクストラクティブ。世の中の課題をクリエイティブ分野で解決することを目的に、ウェブサイト、映像、印刷物の制作、さらにはイベントやプロモーションの企画立案など、多岐にわたる業務を展開。広告業界で大きな注目を集める、新進気鋭の企業だ。大手クライアントや広告代理店と共にさまざまな案件を手掛けるほか、最近では自治体と連携し地方創生に関わる事業も行っている。

同社には、営業、デザイナー、プランナー、エンジニアといった職種が一堂に会する。一つの案件に対し、ジャンルの垣根を越えて活発に意見を交換。それぞれの専門的知識を組み合わせながら、よりよいクリエイティブの提供を目指している。また、充実した福利厚生も同社の魅力。社員旅行、社内イベントのほか、会社がランチ代を補助するランチミーティングなども設け、普段から社員同士が気軽に相談できる場も用意している。

仙台オフィスは2017年に設立。そこでエンジニアとして働くのが三浦綾華さんだ。「元々コミュニケーションを取るのが苦手でしたが、入社から4年経ち、今はすっかり仕事にも慣れました。ITの仕事は大変だと思っていましたが、みなさん優しいし、福利厚生も充実しており、楽しく仕事ができています」と笑顔の毎日を送っている。

ユーザーが楽しんでくれる その光景を見つけた時に 作り手として喜びを感じた

昔から電子機器に触れるのが好きだったという三浦さん。石巻好文館高等学校卒業後、東北福祉大学情報福祉マネジメント学科に進学。プログラミングの勉強にまい進した。「大学ではJavaScript（※）を使って、スマホのアプリなどを作りました。自分でコードを書いて、その結果が返ってくるというのがとても楽しかったです」

普段は、同社が請け負うウェブサイトの制作や運用を主に担当している。「自分が作ったサイトが公開されたときの達成感が気持ちいい」と話す三浦さん。最近では、近年SNSで流行りの診断サイトのシステム開発を担当。作り手として新たな喜びも感じた。「ある時、SNSを覗いたら、診断結果をSNS上でシェアしている人を見つけました。実際にユーザーが楽しんで利用しているのを見ると、とてもうれしい気分になりますね」。

そんな三浦さんの今後の目標は、自分ならではの武器を持つこと。「ただ単に先輩と同じ道を進むのは、会社も求めていないはず。草木をかき分けて、自分だけの道を探していきたいです」。ちなみに三浦さんは「休みの日は寝るかゲームをするか」というほどのゲーム好き。いずれはそうした分野の制作・開発にも携わっていきたいという。業界内ではまだまだ若手の26歳。どんな成長を遂げるのか、その伸びしろが実に楽しみだ。

※JavaScript＝ウェブサイトを制作するためのプログラミング言語の一つ

a：「昔から機械を触ることが好きだった」という三浦さん　b：東京オフィスとは常時画面を接続。連携も円滑に進む
c：普段はウェブサイトの制作や運用を担当　d：アプリの動作等をチェックするための検証機が並ぶ

教えてください！ ACEの仕事ぶり　何事もポジティブに捉える前向きな姿が魅力

上司に聞いちゃいました！

Naoya Henmi
シニアテクニカルディレクター
辺見 直哉さん

ほんわかした性格ですが、何事にもポジティブで前向きに動いてくれます。他の社員が面倒くさがるような仕事も率先して取り組みますし、実直で真面目な姿勢も彼女の良さだと思います。3年以上が経ち、エンジニアとしての下地はだいぶ出来上がってきました。あとはそこにどんな個性を足していくかが、課題であり楽しみな部分でもあります。大きな武器を一つ持つことで、周りから「これは三浦さんにしか頼めない」と指名されるぐらい、オンリーワンの存在になってほしいです。

「会社の幅を広げるためにも、自分の色をどんどん出してほしい」と辺見さん（左）は三浦さんの成長に期待する

未来のACEへ！

＼センパイから／

三浦 綾華さん

好きなことに挑戦するというのは、とても大事だと思っています。実は私も、母親が看護系の仕事をしていて、高校の時までは同じ道に進むつもりでした。ただ、心のどこかで「パソコンを触りたいな」という気持ちがずっとあって、進路の下調べや勉強もなかなか身が入らず、受験の直前で「プログラミングの勉強をしよう」と舵を切りました。あの時、別の選択をしていたらおそらくどこかで後悔していたと思います。今の時代、就職のチャンスは一度ではありません。もし自分の選択が違ったとしても、すぐに道を戻せる環境があります。みなさんも思い切って、自分の好きなことにチャレンジしてほしいです。

Data

株式会社ラナエクストラクティブ

□所在地／仙台市青葉区一番町4-6-1 第一生命タワービル19F（仙台オフィス：2021年1月取材時点）
□代表取締役CEO／木下 謙一　□資本金／1,000万円
□設立／2007年7月（仙台オフィスは2017年3月）　□従業員数／約40人（2021年3月現在）
□事業内容／デザイン設計を含めたソフトウェア開発、およびWeb、印刷物、映像等の制作
□スローガン／「LEAP！」世界を跳躍させよう
TEL 03-5414-3583　https://ranaextractive.com/

『特集』ものづくりにかける
仕事図鑑 #02
ACE.

株式会社東北三之橋（丸森町）
製造1課 検査係
八巻 聖奈さん（20歳）写真右
Seina Yamaki
桃井 亜莉沙さん（20歳）写真左
Arisa Momoi

現代社会に欠かせない 特殊ボルトメーカーで 製品検査に目を光らす

自動車の高度化を高い技術で下支え

自動車用特殊ボルトや、ねじ付き部品、冷間鍛造部品、精密機械加工部品などの製造事業を展開するサンノハシグループで、製造部門として大いに存在感を示しているのが株式会社東北三之橋。技術力の高さは折り紙付きで、つい最近も高性能エンジン向けの「1600メガパスカル級塑性域ボルト」の開発に成功し、世間をあっと言わせた。

ボルトには、一定の引張荷重がかかっている状態で、見た目上は変わらないのに、あるとき突然壊れてしまう「遅れ破壊」が起こることがあるが、新開発のボルトは、この現象が皆無であることや、軽量化が図られているなど、優れた特性を持っていることから、中小企業庁が後援する2020年の中小企業優秀新技術・新製品賞一般部門で優良賞に輝いている。

こうした、自動車の高度化を支える最先端企業に2019年春に入社し、切磋琢磨しているのが、同じ伊具高等学校（丸森町）を卒業した、桃井亜莉沙さん、八巻聖奈さんの2人だ。「仕事ですからつらいときももちろんありますが、2人なので心強い」と声をそろえる桃井さんと八巻さん。2人が担当する自動車用特殊ボルトの1日の検査数は、1人当たりで5万点に上ることもあるそうだ。また、ひと月平均では300種類もの製品を検査するというのだから、とにかくすごい。

「最先端のボルトに心引かれました」（桃井さん）「希望していた検査係で充実の日々です」（八巻さん）

同社のボルトの検査は、目視で行われており、その手際の良さには目を見張る。7本のボルトの頭をそろえたら、ネジ頭から全体にかけて欠けや傷、錆びなどがないか、ネジの溝に不具合がないか、一瞬で確認する。集中力が求められる作業であり、自動車を安全に走らせる上で、非常に重要な部品の検査を担当するため「責任の重さを感じる一方で、社会に役立っていると実感できる仕事」と、2人は日々、充実感を覚えている。

高校時代に共通の友達を通して、仲良くなったという2人だが、東北三之橋と出合うまでの道筋はもちろん異なる。高校二年時に同社でインターンシップを行った八巻さんは、「いろいろ見学させてもらい、社会貢献度の高いすごく良い会社だと実感しました」と話す。一方、桃井さんは「企業説明会などを通し、情報を集めるにつれ、この会社が高い技術を持ち、最先端のボルトを作っていることに心引かれました」と話す。入社して丸2年が経つが、2人はおごることなく、仕事に向き合う。桃井さんは「将来的には後輩に細かいことまで何でも教えてあげられる先輩になりたい」、八巻さんは「他の作業も把握して、仕事ができるようにしたい」と目標を口にする。真面目で笑顔いっぱいの2人が東北三之橋のこれからを支えていく。

a b c d

a：一緒にボルトの検査を行う桃井さん（左）と八巻さん　b：製品には油が付いており、作業にゴム手袋は欠かせない
c：進捗共有のため、報告書に状況を書き込む桃井さん　d：検査済みのボルトの梱包も八巻さんたちの仕事だ

教えてください！ACEの仕事ぶり　真面目でしっかり者の2人です

上司に聞いちゃいました！

Yukiko Meguro
検査係
目黒 幸子さん

2人とも、すごく真面目な性格で、仕事で手を抜くことはありません。桃井さんはおっとりしているように見えてすごくしっかりしていますし、八巻さんもしっかりしているところは同様で、周りがよく見えています。分からないことがあったら、ちゃんと聞きに来てくれるので、向上心もあると思います。検査係は今、13人の体制ですが、一番若く現場を明るくしてくれる2人ですね。順調に成長していますので、後輩ができても、ちゃんと指導してくれると楽しみにしています。

目黒さんを囲んで談笑する桃井さんと八巻さん

センパイから
未来のACEへ！

桃井 亜莉沙さん

八巻 聖奈さん

（桃井さん） 何事も有耶無耶にさせておくと、前に進めないと思います。就職にしろ、進学にしろ、まずやるべきは自分が何に向いているかを突き詰めることだと考えて、行動しました。情報をいろんな所から集め、興味を引かれるものを探していった先に、東北三之橋と出合いました。

（八巻さん） やりたいことを見つける、というのはそう簡単ではないと思っています。それでも、ジャンルやカテゴリーを絞って調べることで、少しずつ分かってくるものもあると思います。自分の好き嫌いもはっきりするし、自分の中で優先したいことが見えてくるはずです。

Data

株式会社東北三之橋
□所在地／伊具郡丸森町寺内前 51-1　□代表取締役社長／長島 賢
□資本金／1,000万円　□設立／1982年　□従業員数／221人（2020年10月現在）
□事業内容／自動車用エンジン・サスペンションの特殊ボルト、冷間圧造部品、精密機材加工部品の製造
□基本方針／（1）永続的企業活動（2）サンノハシにしか作れない自動車用特殊ボルト製造
TEL 0224-72-2760　http://www.sannohashi.co.jp/

株式会社大平昆布（栗原市）
下処理担当
樋口 志織さん（22歳）
Shiori Higuchi

日本の食卓に欠かせない 海藻の一次加工に従事 将来は部門長になりたい

海藻の魅力を多くの人へ 3拠点で製品づくり

刻み、粗砕、粉末化に加え、とろろ昆布の加工といった海藻の1次加工、および道南・日高・道東・利尻・羅臼・三陸産等各種昆布の原料卸などを手掛ける株式会社大平昆布は設立以来、県内にとどまらず、全国の食卓を支えている。自社ブランドは持たずに食品メーカーへ自社で加工した製品を販売する。同社はとろろ昆布に"手削り"という珍しい製法を採用している。製品化までに3日かかるのだが、手削りゆえの特徴としては、味わいに加え、歯ごたえの良さが挙げられる。質にはこだわりつつ、顧客からの短期納品の相談があれば、それに最適な昆布を提案する、というのが基本スタンスだ。

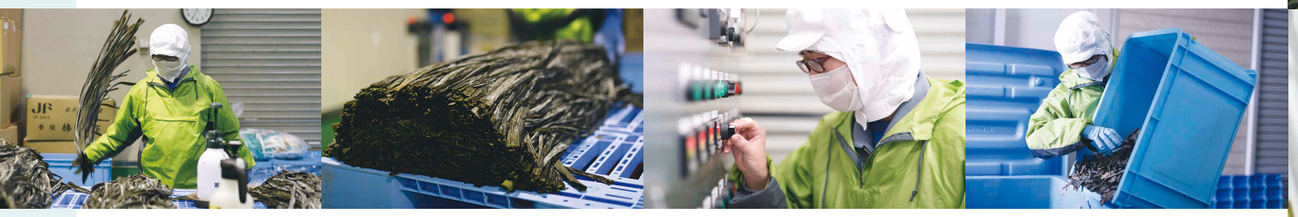
樋口志織さんは、この4月で入社から丸4年を迎える。同社は本社工場、第2倉庫、第3倉庫の3拠点で製造を行っているが、現在、樋口さんが担当するのは第3倉庫での、原料の下処理だ。

昆布を握り、台にリズムよくその昆布を打ち付けていく。昆布に付着した砂、小石、他の海藻などの異物を取り除く作業だ。筋力、体力が必要とされるが樋口さんは「力仕事は慣れました」と屈託なく笑う。確かに、ボール紙でくるまれた「20キロ」の昆布をひょいと持ち上げ、難なく扱っている。

心強い同期と一緒に やりがいと目標を持って 日本の食生活を支える

樋口さんは田尻さくら高等学校（大崎市）の出身だ。「早く仕事をして家計を助けたい」という思いから、卒業後は就職することを決断。そのとき、胸には「パンが好きなのでパンづくりに携わりたいな、という希望を抱いていました」。しかし、求人情報を確認すると「応募を考えていた企業の募集要件に私は合致しないということに気付き、断念せざるを得ませんでした」。ここで樋口さんは改めて自身の思いを整理。作る物は違ったとしても食品関係の道に進むことを改めて決意し、希望していた食品製造業への熱い思いが、大平昆布への入社につながった。

作業は大変だが「私の仕事は日本の食生活を支えていると自負しています。責任も感じますが、やはりやりがいがあります」と樋口さん。そんな彼女が大平昆布で働く上で心強く思っているのは、同期入社の岩崎詩織さんの存在だ。「名前の読み方が同じ"しおり"です。入社してすぐ意気投合しました。プライベートでもよく遊びます」。将来の目標は3拠点それぞれに配され、各業務を統括する部門長になること。「どこの拠点で、というのはないのですが、チームリーダーに興味があります。責任重大ですが任せてもらえるよう頑張ります」。樋口さんは自身と会社の成長を促そうという強い意志を持っている。



a b c d

a：昆布に付いている異物を台にたたきつけることで取り除いていく樋口さん　b：昆布は実に細心の注意を払って扱われる
c：時に、乾燥機の操作も樋口さんの仕事だ　d：乾燥の状況をしっかりと目視で確認する

教えてください！ ACEの仕事ぶり　支え合って会社を盛り上げたい

2歳違いの若い2人が大平昆布の次代を担う

入社当初は物静かな印象でしたが、どんどん持ち前の明るさを発揮してくれて、会社になじんでくれました。働きぶりは実に積極的で、やったことのない作業でも、自分から興味を持って、どんなふうにやればいいかと聞いてきてくれるのでとても頼もしいです。また、そうした樋口さんの姿勢には、2歳しか違わず、年が近い私もウカウカしていられないなと刺激を与えてもらっています。これからも切磋琢磨しながら、会社をもっと盛り上げていけたらいいなと思います。

先輩に聞いちゃいました！

Takeyuki Sugawara
第3倉庫
菅原 剛幸さん

未来のACEへ！

樋口 志織さん

＼センパイから／

大平昆布に入社が決まるまで、2社で不採用になるという経験をしましたが、振り返れば、やはり就職したい、働きたい、という根本の思いがぶれなかったことが現在につながっていると思います。もちろん、内定をいただけなかったときは落ち込んだのですが、時間とともに、いつまでもこのままでは良くない、と切り替えることができました。諦めない、前向きな心が自分を導いてくれます。また、求人の情報はやはりこまめにチェックするべきだと思います。自分の興味のあることを中心に、仕事を探すと道が開けていきます。条件に優先順位を付けるのも非常に有効です。

Data

株式会社大平昆布
□所在地／栗原市志波姫南郷蓬田1（本社事務所・工場）　□代表取締役社長／伊藤 正吾
□資本金／3,200万円　□設立／1948年　□従業員数／24人（2021年1月現在）
□事業内容／海藻の1次加工（刻み・粗砕・粉末・とろろ昆布の加工）他
□経営基本方針／一、海藻の良さをもっと多くの人に伝えていきたい
二、たくさんの人の喜ぶ顔が見える　三、人の心が分かる会社だねと言われる
TEL 0228-25-3553　https://www.taihei-konbu.co.jp/

株式会社聖人堀鐵工所（石巻市）
船体担当
本木 卓見さん（26歳）
Takumi Motoki

アルミ船づくりのパイオニア企業で技術習得にまい進

船体づくりに大いに体力を生かす

終戦直後に設立された財団法人宮城県物資更生協会石巻支部聖人堀鐵工所を起源に持つ株式会社聖人堀鐵工所。法人化は1949年のことだ。手掛ける仕事の内容は時代とともに移り変わってきた。船舶金具製造から鋼船製作、そして、もちろん、各種メンテナンスも事業として起こしてきた。現在、日本でのシェア約8割を誇る小型軽合金船（アルミ船）の製作は80年にスタート。それまでの鋼船づくりで得たノウハウに加え、独自にアルミ船に適した製作方法を生み出し、唯一無二の存在として全国にその名をとどろかせる。阿部幸一社長によれば、アルミ船のメリットは「軽量化と耐用年数の長さにある」という。2011年の東日本大震災では大きな被害を受けたが、当時、社員の解雇は1人として行わなかった。震災後、社屋・工場とも移転再建を果たし、コロナ禍でも、社業は順調に進展している。

本木卓見さんは入社8年目。船体づくりを担当し、小学生の時から空手と野球で鍛えてきた運動能力の高さと責任感の強さが大いに生かされている。「アルミ船は骨組みもアルミで本当にアルミだらけ。3ミリから25ミリの厚みのアルミ板を必要なサイズに切り出して、それを溶接でつなぎ合わせて作っていきます」。そう話す顔つきは実に精悍だ。

目の前の仕事に集中出来上がったときの達成感が気持ちいい

電動ノコギリを使ってアルミ板を切ったり、バーナーを駆使して溶接したり、本木さんの動きは無駄がない。「基本、当社で作っている船はまき網漁業で使われるのですが、小さいボートでも完成まで1カ月、少し大きいレッコーボートなどになると3、4カ月かかります。出来上がるまで長い時間を要しますが、だからこそ、完成したときの達成感は大きいものがあります」。

本木さんは宮城県水産高等学校（石巻市）の海洋学科に進み、二年次からはマリンテクノ類型（現機関工学類型）で学んだ。「マリンテクノに進んだから、造船の会社に入りたかったというわけではないのですが」と笑うが、もともと、ものづくりの道に進みたいという希望を持っていたそうだ。日々の作業について聞くと「きついです」とまず一言。「工場内の暑い、寒いもありますし、やはり覚えることもたくさんあり、作業自体も力仕事で大変です。その上、納期を守るためには残業をしなきゃいけないときもあります」。それでも懸命に日々、本木さんが仕事をするのは、依頼主の存在が大きい。「私たちが作る船を待ってくれている人たちがいます。予定された作業を毎日積み上げた先に完成があるので、これからも一日一日精いっぱい取り組んでいきます」。本木さんの決意の言葉は力強かった。

a：切り出したアルミ板を慎重に運ぶ本木さん　b：溶接は高い集中力を持って丁寧に行う
c：研磨機でアルミの表面をきれいに磨いていく　d：1艘のアルミ船を作るのに長いと4カ月程度かかる

教えてください！ ACEの仕事ぶり　しっかりと責任感を持って仕事をする頼もしい後輩です

Tatsunori Ishikawa
船体担当
石川 辰紀さん

性格は明るく、優しいです。物言いはストレートで分かりやすく、裏表がないですね。アルミ船づくりはチームで行うとはいいながら、1人での作業が多いのですが、自分の役割はしっかりと責任感を持って取り組んでくれています。溶接など、技術の習得が速いだけでなく、仕上がりのレベルも高いので、この仕事には向いていると思います。船の各種装備を受け持つ艤装チームから船の本体を作る船体チームに移って約3年、若手社員の中心的存在です。

作業の進捗を確認し合う石川さん（左）と本木さん

未来のACEへ！

本木 卓見さん

高校卒業後の身の振り方を考え、そして、決めるというのは、それまでの人生の中では一番大きな決断の経験だと思います。選択肢は多くあり、だからこそ悩むことは当たり前です。ただ、いつまでも悩んでばかりはいられません。時間が過ぎていく中で、決断は迫られてきます。そうしたとき、大事なのは、やはり何を重視するかだと思います。就職するのであれば、仕事内容でもいいし、職種でもいい、給料や休日の日数、福利厚生、自分は何を優先して仕事をするのか、それを決めて行動すれば、おのずと道は開かれていくと思いますし、仮にどこかでつまずいても、それが乗り越える一つの指針になります。

株式会社聖人堀鐵工所

□所在地／石巻市南浜町1-7-70
□代表取締役社長／阿部 幸一
□資本金／1,300万円　□設立／1949年　□従業員数／23人（2021年1月現在）
□事業内容／小型軽合金船（アルミ船）製作、船用ディーゼル機関の整備、修理、検査ほか
□経営方針／ナンバーワンよりオンリーワンを目指す　TEL 0225-22-4155　※ホームページなし